

航空燃料で火種を作ったり、兵隊にはいろんな人がいて、何でも作った。

私はジャングルへ物資収集に行ったが、一抱えもある冬瓜があったり、唐辛子もあった。ジャングルの中で食べられそうな物は取って来た。

終戦迄の話だが、栄養失調やマラリアと脚気で歩けなくなる。私はアンボンの陸軍病院へ赤痢で三十日間入院したことがある。ニューギニアへ本隊が行く時、遅れたら死んでしまうので必死で一緒に連れていってもらうよう頼んだ。病人は真裸で、病院は地獄、薬も食糧もない。私は木炭を薬にして下痢を癒した。

最後の集結地はソロンであった。昭和二十一年六月、リバテーで田辺港まで直航、十日間で帰ることが出来た。その間にモロタイ島に寄港したが、戦犯者が沢山いた。私の部隊でも、大尉と軍属が引っぱられて、モロタイ島で処刑された。モロタイ島が処刑場だった。住民や連合軍の面通しで「お前だ」と言われればそれでおしまいだ。人違いであろうと、悪意であろうと、無実であろうと、それだけで戦犯となってしまう、処

刑された人が随分いた。

復員後もマラリアが出て高熱や悪寒で苦しんで、体力の回復も遅かった。私は戦前郵便局に勤めていたが復職出来ないため、農協に勤め公務員でなくなった。その後、キニーネを飲んで、マラリアは二年ぐらいで出なくなった。軍隊で鍛えられたためか、体は丈夫になった。

インドネシア独立の先兵

兵補教育と終戦

兵庫県 神崎 芳郎

私は大正十年四月十五日生れ、入隊後、陸軍兵器学校に入校、昭和十八年十月、同校を卒業し、南方戦線に従軍しました。終戦後の昭和二十二年四月復員するまで、その間三年七か月に及んでいます。

着任時は南方総軍直轄の南方軍野戦造兵廠という後方勤務でありましたが、南方軍技術部幹部候補生なら

びに下士官候補の教員、あるいはインドネシアの青年で編成された「兵補隊」を指揮しての要地警備という極めて多様な軍務に従事、さらにインドネシアの独立にも際会、終戦時徹底抗戦、独立軍との合流などという、ドラマチックな青春を命がけで体験いたしました。

五十年前のことで記憶は薄れているかもしれませんが、私は当時の日本の前途を憂い、現役志願と、工科学校受験と二つを行ったのですが、現役志願が先で、原隊は朝鮮の亀山の歩兵連隊です。全国各地の志願兵を集めての教育でした。

当時、私の父母は死亡しておりましたが、大きい姉は嫁いで分家をしていて、実家は広い田畑を持った地主でしたのでそれを守ってくれておりました。私は長男でしたが、家宝の「長船」の刀を持って志願をし、それで何でも負けるものかという気概を持っていました。志願兵として勤務したのは中支、江西省の瑞昌でした。

その瑞昌で工科学校へ入校ということになり、九江から一人で民間の東亜海運の船に乗り揚子江を下り、

さらに船を乗り継いで長崎港へ上陸しました。神奈川県相模原の工科学校第二十三期生として入校しました。日本の陸軍は、ノモンハンでソ連の機械化部隊に敗れたので、技術幹部養成のため技術学校が出来、工科学校となったといえます。

私は工業学校出身でした。陸軍学校の教育は厳しかったが、私にとっては為になりました。淵野辺の学校では普通学科（一般ではその時代英語を余りやらなかったが、軍の幹部となるのだから英語が必要ということで、英語も教わった）も随分やり、軍事は兵の基礎訓練、それと共にその他の技術教育も受けました。

第二十三期生は約八百人（全国各地から、韓国の人も少数いた）入校しましたが、一年生の時大東亜戦争開戦となりました。以来昭和十七、十八年と三か年間鍛えられましたが、よく耐えたと思っています。私は次に技術将校となる本科生となることを希望していたのですが、終戦となりその目的は達せられませんでした。

冒頭申し述べたように、昭和十八年秋から南方で勲

務したのですが、インドネシア、ジャワでの兵補教育、兵補との勤務、終戦後のことなど、私の人生の白眉ともいうことなどをお話したいと思います。

兵補とは日本の兵隊の助手というようなもので、私が昭和十九年シンガポールへ行った時は既にいて、日本軍に協力していました。インドネシアの場合は独立をした時は国軍の基幹になるという目的理由がありました。

兵補はジャワの各地から青年を選抜した。だから皆優秀でした。会話は必須科目で、日本語を習っていたが、我々もインドネシア語を習いました。彼等は日本の軍歌も知っていたし、号令も全部日本語です。肩章(階級章)はベタ黒に黄色い星、上等兵は日本と同じ三ツ星でした。兵器はオランダ軍の押収兵器、小銃とかの小火器ですが、中々勇敢でした。

インドネシアの独立は自分の手でと、我々も教育しましたが兵補は特にその意気込みでした。長い間、オランダ等の植民地でしたので、日本軍の進攻に力を得て、自信を持つようになったのでしょ。私は伍長、

軍曹の時は上級職をとらされていたので、兵補五十名ぐらい連れてジャングルに入り、要地警備とか、山中の弾薬庫警備とかの小哨長とか小隊長代理をしていました。一個小隊は十名程が日本兵で四十人がインドネシア兵補です。小哨長となると教個所に分哨を出し、これを総括指揮するのです。

これ等独立勤務は責任があります。教育は不断からしているので兵補でも勤務が出来る。日本兵の未教育補充兵より上だ。なかなか気概があり、精神的にも優秀でした。彼等は今までオランダに虐げられていた。今度は自分達は独立しなければならぬ。その気概でしたし、植民地だったのを日本軍が来て助けてくれたということですから、物凄く感謝していたことを、私は一緒に勤務していたので知っています。

アジア会議というので決めていたのが、たしか昭和二十年八月二十日かに独立宣言をするということだったと記憶していたが、残念ながらその日は終戦の五日後だったので。スカルノ大統領は社会主義者だったのでしょが、インドネシア独立を看板にし、日本人

の協力を得て反オランダ政府活動をしていたのです。住民も物凄く協力的でした。そのため終戦後も、私が軍の学校出身者であるので、特に「是非共インドネシア独立軍に来てくれ」といつてきました。

私も若かったので、日本に帰ったとてどうなることか、という気持ちも持っていました。そのため、時によつては「残ろうか」と思ったこともありましたが。私も敗戦でムシヤクシヤしておりましたし、我々の学校の先輩もおるし、陸軍士官学校出身の将校もいました。そのうえ、兵補が皆迎えに来た。その中にアミンという名の者もいました。

詔書必謹を上司の部隊長が説得したが、そんなことはかまわず「日本国籍を脱してもやろうじゃないか」という気持ちにもなった。しかし、結局「終戦」、これじゃ仕方ないということになり、閑院春仁若宮殿下が勅使としていらっしゃいまして、それから逐次「詔書必謹」の情勢となつてきました。

当時、南方軍には寺内元帥もいたし、板垣征四郎、中村明人、武藤章など錚々たる将軍がいたし、辻参謀

や馬淵元情報部長もいた。南方軍は独立して、弱腰の日本政府の言うことなど聞くものか、という気概もありました。そんなことで戦争を止めろといつても直ぐには治まらない。しかし上司も誠意をもって真剣に説得に努め、決死の覚悟で諄々と非を説いた。我々はついに従わざるを得ませんでした。

南方軍でも、ニューギニアやフィリピンは苦戦していたが、泰や馬來、仏印やインドネシアは負けていない。力を温存していたから健在であるからと。インドネシアでもM4戦車に向かつて黄色火薬攻撃する訓練を盛んにしていました。その上、インドネシアの軍人は、自分等が国家のために尽くして死んでも、また生き返るといふ宗教思想（信仰）があった。回教徒は強烈で、日本人が一寸近寄れぬくらい物凄い精神力をもっていました。

インドネシアの兵補等は自分が下敷きになつてもやると、闘志満々でした。先程申したとおり、私は下手な日本軍召集兵より教育のしがいがあった。士気は物凄く上がっていた。だから一緒に勤務しても部下とし

でも頼り甲斐があり、私達は終戦まで接触していたのです。先にも言ったように昭和二十年八月二十日頃か、自力で独立するようにと日本の軍政官部がインドネシアに言った。しかし当時、暗に志ある者は離隊してもいいという話もあった。インドネシアが自力で独立とは可哀想ではないか、協力しよう、やってやろうと二千名ぐらい離隊した兵隊もいたという。その頃現地に日本邦人を含め七万人いたといえます。

それと、マラバルという要塞化した山がある。そこへ敵を迎え撃つという。三〜四年は補給せずとも持ちこたえる米などの食糧があるといわれた。これら物資を日本軍はインドネシア軍に放出した。日本軍は扇動することは出来なかつたが、インドネシア頑張れよという空想もありました。だからインドネシア軍は、指導者が少ないから我々に来いということだったのでしょう。

終戦になり、日本軍はオランダ軍捕虜を解放したが兵力は少ないので恐がっていた。そのためイギリス兵も進駐して来たが治安がとれぬのでどう仕様もない。

そのため一度は武装解除した日本兵はまた兵器を渡して警備させたわけです。インドネシア兵補などは日本軍に教育を受けたので強く、これらがオランダ兵を囲んでいるため、窮余の一策というわけです。我々は一年ぐらい武器を持っていました。

インドネシアのジャワ島では各地で暴動が起こるので、私は昭和二十二年まで、一年半残されました。元大本営の馬淵情報部長（当時少将で旅団長）が犬養健氏を通じマッカーサーに申し出たことがあり、我々俘虜の武装と酷暑の中の重労働を解除し、復員出来るようになつたと聞いています。

例えば、終戦後インドネシア独立に参加してくれと懇請されたアミン青年に、私の軍刀と拳銃を渡し激励し別れたのだが、あの時、彼の言に従っておれば、その後の私の人生は大きく変わったであらましよう。

また、戦争継続を強行しようとした時、あの一触即発の危機まであった時、「大元帥閣下の命令を必謹するのが日本軍の本務である」「日本再建は必ず成る。それは君たちの若い力が是非要だ。老骨の私たちは

どうなっても良い。殺すなら殺されてもそれで満足だ」等説く上司と共に抱き合つて慟哭したが、若しあの時、徹底抗戦をしていたらどうなっていたであろうか。

戦後五十年になろうとしている今日、当時多感な二十四歳の軍人であった私の姿が臉に浮かんできます。灼熱の地での連合軍の強制労働、埠頭での積み込み、荷揚げ作業、特に八十キロ入りの砂糖袋や大きなゴム素材の運搬などに歯を喰ひ縛つて耐えた姿。報復的かとも思われる屈辱的作業、放水路清掃の名のもとに胸までどぶ河に入つての作業、炎熱下心なき民衆に侮蔑されつつの道路整備作業等々どれをとつても苦痛の姿であつた。

しかし、私の戦中、終戦抑留中は肉体的には苦しんだが、インドネシア独立軍に頼られ、また目出たく独立したこと。また、あらゆる困苦に耐えた、精神を強化させたことを回顧し、私はあの時、若き心身を燃焼出来たと思います。終戦時、私は次の歌を詠みました。

武士の 魂と磨きし 剣太刀

今ぞ収めて 畏みまつる

いかにせん 忍ぶ心の 一筋に

散るより難き 丈夫の道

朝廷辺に 散りにし友の 心もて

吾はつくさむ 日本再建

私の陸軍生徒より始まつた数年の軍務生活、それは私に多大の体験と試練を与えた。偏向教育の恐ろしさ、戦争の空しさ、悲惨さ、民族の共存共栄の必要性、人間社会及び階級社会の矛盾、特に底辺に呻吟する人々の姿等をさまざまと見せられ、無言の教えをしてくれたと思います。

終戦の 詔を 諾はず

砦に抛りし 若き兵の日

夏来たれば 憶いめぐらす 終戦の

あの日あの時 南の島の